

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 13 日現在

機関番号：32670

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520834

研究課題名(和文)南北朝・室町時代の寺社における奏楽の基礎的研究

研究課題名(英文)A Basic Research of Gagaku at Temples and Shrines During the South and North Courts and Muromachi Periods.

研究代表者

三島 暁子(AKIKO, MISHIMA)

日本女子大学・文学部・研究員

研究者番号：30582423

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：寺社における雅楽の奏楽活動に着目し、奏楽の場の具体像、また、それらに参仕する楽人の実態を明らかにするための基礎的考察を、北野天満宮を中心に行った。一日のサイクルにおいて、年中行事に組み込まれたもの、特別な機会によるものなどを明らかにし、また、それらが時代の推移と共に変化する状況についても明らかにした。さらに、そうした奏楽の場の隆盛には、足利將軍家の影響が色濃く伺える点についても、一切経会を例に指摘した。

研究成果の概要(英文)：In order to clarify the concrete images of places of sougaku and aspects of the players who serve it, I focused on the activities of performing gagaku at the temples and shrines; then, made fundamental researches mainly at Kitano tenmannangu. I made studies of their images and how they changed as times go by, clarifying the performances into three categories: what played as everyday-routine, an annual event, and a special event. Besides, with an example of All the Buddhist sutras society, I also indicated that a great influence of Ashikaga shogun family could be seen upon the prosperity of those places of sougaku.

研究分野：日本文化史

キーワード：雅楽 寺社 舞楽法会 一切経会

1. 研究開始当初の背景

従来の研究における音楽(雅楽)の位置づけは、国文学(漢詩・和歌)・美術史(絵画・彫刻)などに比して、あまりに小さく扱われてきたといわざるをえない。これまで雅楽の受容と具体像についての歴史的研究が十分に示されてきたとは云い難く、これを端的に示すのが芸能史における通史的解釈である。すなわち、時代の担い手が公家から武家へと転換するのに伴い、朝儀と深く関わってきた雅楽は衰退・形骸化してゆき、代わって室町時代には猿楽・能といった新興の芸能が武家の庇護を得て隆盛するというものである。結果、室町時代の雅楽は衰退期と位置づけられ、論じる価値は無いかのように扱われてきたのである。しかし、近年の王権論の高まりとともに、帝王の権威を象徴した文化としての音楽(雅楽)の役割が注目されるようになってきた。これに伴い、雅楽研究もそれまで中心となってきた平安時代から、ようやく室町時代後半にまで拡大されるようになったところである。

申請者のこれまでの研究は、公武の文化的権威の柱として雅楽が重要な役割を担ってきた点について、主に朝廷・幕府の儀礼に着目したものであった。また、そうした奏楽の伝承を実際に担った地下楽人の具体像を明らかにしてゆくという、二つの視点から成るものであった。これらの点は継続して追求してゆく必要があるが、大きな柱として奏楽の行われた「場」にさらに着目する必要性を痛感するに至った。従来の雅楽研究は、どうしても朝廷・幕府といった権力との関わりが顕著となる個別の儀礼に集中しがちであった。だが、そのような臨時的な場とは別に、恒常的に奏楽を必要としていた場として、寺社における奏楽というテーマが重要となるのである。

2. 研究の目的

申請者が朝廷や幕府の諸儀礼を中心に明らかにしてきたこれまで点を踏まえて、室町時代の雅楽における寺社の奏楽について考察するものである。寺社における奏楽の場をみてゆくと、将軍家が雅楽受容の場を直接・間接的に偏していた点が明らかで、この点を日本音楽史の中に正しく位置づける必要があるといえるだろう。室町時代の法会・祭礼文化を考える上でも、将軍家と雅楽という視点は重要な鍵となり得るのである。

また、申請者は、室町時代の楽人の参仕の意識に「禁裏奉公」「武家奉公」の別がある点を掴んでいるが、将軍の参詣時・将軍家の祭礼料所安堵によって運営された寺社での奏楽も、「武家奉公」の具体像と捉えることができるだろう。こうした点を手がかりに、寺社における奏楽の場の個別研究と将軍家の雅楽の位置づけを俯瞰的に考察し、位置づけてゆくことで、室町時代の雅楽受容・楽人像の時代性を浮かび上がらせることが可能

と考える。さらに、寺社においては年中行事や日々の勤仕において、恒常的に必要とされた奏楽の場があった点を忘れてはならない。楽人たちの日常を理解するためにも、寺社ではいかなる奏楽が行われていたのか明らかにする必要がある。

3. 研究の方法

(1) 古記録・古文書(『北野社家日記』、『北野天満宮史料』、『満濟准后日記』、『醍醐寺文書』、『看聞日記』、『山科家記録』)・楽書類などの記述から、奏楽に関わる記事を検出して考察を加える。得られた記事の分析においては、場と空間の視点、人と物ネットワークの視点、音楽の効果といった多角的な視点から行った。

主な調査先

- ① 京都大学附属図書館(2011年7月8日)
- ② 国立歴史民俗博物館(2011年7月14日、12月23日)
- ③ 京都国立博物館(2011年11月16日)
- ④ 北野天満宮(2012年10月18日、2013年12月25日)
- ⑤ 京都文化博物館(2013年11月29・30日、2014年1月30日、)

(2) このほか、史料の読解を深めるために関西地域の寺社を中心として、法会・行事で舞楽が奏されてきた主要寺社の現地踏査を行い、奏楽時における建築物と空間の関係を考察するための手がかりを得た。

(主な調査地：石清水八幡宮、篠村八幡宮、醍醐寺、泉涌寺即成院、春日大社、四天王寺、丹生都比売神社、信貴山朝護孫寺、谷地八幡宮ほか)

併せて、楽器・装束などの伝存状況についても調査し、各寺社固有の歴史と舞楽法要との関わりを考察する際のデータを収集した。

また、史料分析にあたっては笙の演奏家に実技面・音楽学からの助言を求めて、古楽譜や奏楽記録の解釈を深められるように努めた。

4. 研究成果

(1) 将軍家・守護大名による文化牽引の具体像を、北野天満宮について着目して検討し、いかなる奏楽の場が存在したのかを明らかにした。

北野天満宮といえば、阿国の歌舞伎をはじめとし、勧進興行が盛んに行われたこと、社頭図等の絵画資料などから「芸能の場」として近世の隆盛が広く知られている。しかし、実は舞楽・雅楽の奏される場としても長い歴史が存在するのである。現存する最古の舞楽図(鎌倉時代)は北野の社頭におけるそれを描いたものであるし、現在は千本釈迦堂に伝存する鼈太鼓(南北朝時代)は、北野天満宮の舞楽で用いられたものである。

また、北野天満宮といえば天神様であるが、

室町時代の往来物には法楽として天神に管絃・詩歌・連歌等を捧げることが記されており、様々な奏楽の場が存在したことが推測されるのである。北野天満宮の日々の営みのなかでどのような奏楽の場が存在し、楽人らはどのように関わっていたのかという点について、『北野社家日記』『北野天満宮史料』等の古記録を中心に記事を精査した。

一日のサイクルにおいては、まず、毎日の御供備進に関わる奏楽があった。このほか、御供に関しては、十日ごとの「旬御供」や年中行事に関わる「忌御供」といった特別な御供の備進に際してや、願主による臨時の祈祷に関わるものなどが様々にあって、通常五人の楽人が参仕していた。また、楽所には有力守護から寄進された太鼓もあったことが明らかとなった。

年中行事の視点からは、天神講（毎月十八日）・御神楽（毎月十八日）・舍利講（毎月晦日）・二季の御神楽・三年一請会・北野一切経会・足利将軍の社参や参籠時における法楽にも楽が奏されている。

行事それぞれの費用や楽人の得分などについて具体的数字が引き出せた一方で、経済基盤の破綻により、年中行事そのものが懈怠してゆく十六世紀の様子については、二季の御神楽の例から明らかにした。同様に、将軍家の庇護あつた北野天満宮においても、室町後期になると舞楽における「舞童」の存在がみえなくなる点も整理した。

室町時代も後期になると足利将軍家の弱体化に加え、北野天満宮の焼亡という物理的な要因が重なって様々な行事が縮小されたが、それ以前の北野天満宮においては、将軍の崇敬を集め、隆盛を誇っていた。特に足利義満・足利義持の頃には頻繁に将軍が参詣・参籠し、それに伴って貴族・武家が集う文芸の場があったほか、万部経会、一切経会など、室町の一時期に特徴をもって継続的に営まれたものがあったのである。万部経会における足利将軍家の関与は知られるところであったが、十五世紀に再興された一切経会についても、足利義持が深く関与して開始されたものであった事を明らかにし、寺社の文化史の流れに位置づけることを試みた。

また、そのようにして開始された北野天満宮の一切経会における舞楽法要が、いかに衆目を集めるものであったのか、当該期の他所での舞楽にも少なからず影響を与えるものであった点について記事を示すことが出来た。

室町時代の北野天満宮の具体像を引き出すことは、同様に将軍家との密接な関係により隆盛を誇った他の寺社（石清水八幡宮・醍醐寺法身院〈足利将軍家の庇護で洛中に建った醍醐寺の別院〉など）との比較検討への手がかりとなるばかりでなく、楽人参仕のネットワークにおいても有効な視座が得られるものといえる。特に足利将軍の社参には、石清水八幡宮・若宮八幡宮・北野天満宮といっ

た一連のルートがあり、それに伴って楽人にも交流が生じている。楽器や装束の貸し借りといった点のみならず、よりよい権利を獲得するために他所での例を持ちだす姿などを記録から抽出することができた。

寺社の威儀を高める役割を担った舞楽・雅楽から、室町将軍家と寺社との関係を捉えつつ、他の寺社へと考察を広げてゆきたい。

これらの点については、東洋音楽学会西日本支部第261回定例研究会、および日本音楽史研究会第四回研究発表会にて口頭報告を行った。口頭発表での質疑などをふまえて草稿に加筆修正を行っており、機関の研究紀要等を発表媒体として発表してゆく予定である。

また、北野天満宮には近世史料が多く伝存しており、室町時代の諸行事がどのように近世に継承・移行するののかという点について、時代を広げて分析してゆくことが重要になるといえる。以降、継続して取り組むべき課題である。

(2) 地下楽人豊原信秋による応安七(1374)年「豊原信秋記」を史料として、楽人の一年について分析を行った。楽人による日次記は近世のものは多く伝わるが、南北朝期の「豊原信秋記」は近世以前の楽人日次記として極めて貴重な史料である。

申請者はこれまでも本史料に言及しながら考察を行ってきたが、部分的な言及に留まっており、史料全体像の解明は未着手であった。このため、この度は伝本を調査し、楽人の日常の模様・同族間での役割分担や対立の模様・交際圏等の柱を設けて記事を分析して草稿を作成した。

しかしながら、当該史料については期間内に原本調査を行うことが叶わなかったこともあり、また、周辺史料によって分析の補強を図る必要もあるため、成果の公開にはもう暫く時間を要する。

もう一つ、南北朝期の楽人日記によって理解できた楽人の日常と比較する上でも重要な史料となるのが、室町時代の『看聞日記』である。記主の伏見宮貞成に仕えた地下楽人豊原郷秋の動向についても詳しく記述されているため、豊原郷秋に着目して、その活動の模様について、先の豊原信秋の例を踏まえながら分析を行った。

- ・楽の「伝授」や行事への参仕を盾に様々な権利の主張を行う楽人像
- ・勅勘を蒙った際の権利回復の模様（「禁裏奉公」「武家奉公」について）
- ・病気等で代理を立てる際の模様
- ・奏楽以外の役割で貴族に仕える姿
- ・権利獲得をめぐる、楽家に生じる嫡流庶流の問題
- ・重奏層的なものであった楽人の主従関係について

以上の点について地下楽人の日常を明らかにし、楽人として参仕する上で必要であつ

た諸手続きについて事例をまとめた。

また、『看聞日記』を記した貞成の立場から見れば、伏見宮家を象徴する持明院の楽統継承とは、単に貞成個人が琵琶の稽古に励みさえすれば果たせるといった単純なものではなかったのである。貞成の琵琶を中心とする楽の場を運営することまでが楽統の継承に含まれていた訳で、当然のことではあるが、そのためには地下楽人の下支えが必要不可欠であった点について示した。

これらに関しては、名古屋大学の研究会において口頭発表を行った。紙面での発表については、現在準備中である。

(3) 史料調査においては、堂上楽家である菊亭家旧蔵の楽書類披見の機会を得た。楽人においても、堂上と地下という身分差があり、それによって集積される楽書類、関係文書にもおのずと差異が生じる。そうした点を考察する手がかりとして有益であるため、新たな課題として、今後継続して取り組むものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計3件)

①三島 暁子、15世紀の北野社一切経とその周辺、日本音楽史研究会第四回研究発表会、平成26年10月19日、上野学園大学(東京・台東区)、

②三島 暁子、室町時代北野社における奏楽の場、東洋音楽学会西日本支部第261回定例研究会、平成25年7月21日、京都市立芸術大学(京都・京都市)、

③三島 暁子、伏見宮貞成と豊原郷秋、名古屋大学比較人文学先端研究特別演習公開研究集会「中世の音楽・中世の世界像」、平成24年12月24日、名古屋大学(愛知・名古屋市)、

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三島 暁子 (MISHIMA, Akiko)

日本女子大学・文学部・学術研究員

研究者番号：30582423

(2) 研究分担者
なし

(3) 連携研究者
なし